

初心者カウンセラーの変容過程

——特にケースカンファレンスに着目して——

葛西 真記子*, 土橋 佳奈美**

(キーワード: カウンセラー, カウンセラー自己効力感, 自己内省, 他者意識, 視点取得)

【問題と目的】

1. 心理臨床活動

近年、人のこころに関わる臨床心理士が、教育・医療・福祉・司法・労働など多岐にわたる場で大きな社会的要請を受けている。日常的に経験する、親子関係や友人関係、恋愛関係、育児や身体の病に対する悩み、そしてそれらの問題に対する自分自身など、何かしらの問題や悩みを持つ人に対して、心理的健康を増進する活動の重要な担い手として期待されている(下山ら, 2003)。臨床心理士とは「臨床心理学に基づいた知識と技術を用いて人間の“こころ”の問題を援助する対人専門職(日本臨床心理士会:財団法人日本臨床心理士資格認定協会, 1988)」であり、田中ら(2009)は「相談に来られる方が自分自身のこころの問題の解決に向かって歩む道に同伴する臨床心理実践という仕事を行うための専門的な教育・訓練を受けた者」と記している。

しかしながら、その社会的要請の大きさに比べ、現代の臨床心理学では、「旧来の科学観、学問観に縛られての形式の整合性に関心が向き、表層的には論理の形はできあがっていても、現場では使用できなかつたり、限定された対象に一時的な効果をあげる事はできても、その人の生涯という点から見ればマイナス効果をもつ事もある(河合, 2004)」と指摘されるように、それに応え得るだけの理念・理想・実践スタイル・パラダイム(模範)が十分に確立されているとは言い難い(皆藤, 2003)。人間関係の存在を前提とし、その事をも課題として捉え、関係性を重視する臨床心理学は「新しい科学」であり、まだまだ発展過程である。「関係性の学」として新たなパラダイムを構築していく途上にあると考えられている(皆藤, 2003)。また、藤原(2002)は、クライアントとの実践的な関わりの中で、こころを使った人間関係を専門業務として行う事が日常生活において如何に忘れやすく持続困難である事を強調している。そして、体験的かつ歴史的に、この事実の難しさに注目し、その必須性に気づいたという点で、臨床心理士はこころの問題を専門とする新しい専門家であると言う。つまり、仮に、大学の学部時代に心理学を専攻していたとしても①実践的な“臨床心理学”を学ぶ事については“初学者”である事、②大学院が大学の上に設けられ教育の最高峰ではあるものの、また、臨床心理士の資格を取得すれば、こころの専門家として位置づけられるものの、これまでの歴史の中で、“こころの問題を専門にアプローチする事は初めての試み”である事を忘れてはいけないのである。そして、“こころの問題を専門にアプローチする者として“初心者”でありながら、臨床心理士養成の指定大学院を修了すれば、臨床心理学を習得した2年目として、社会人として、対人援助の専門家としての役割を担わなければならない(皆藤, 2003)。

そのために、大学院の2年の間に臨床心理学の知識と技術を身に付け、専門家になるような効果的な訓練をすることが必要となる。知識や技術の講義だけでなく、実践的な訓練が必要であるだろうし、その訓練過程において、それぞれの学生がどのような内的体験を行うのかが重要だと考える。

2. 心理療法家に求められる資質とその訓練

(1) 自己理解・他者理解・視点取得

葛西ら(2009)や北島(2010)によれば、心理療法家に必要な資質として、感受性や想像性、共感性、自己内省力、自己理解が挙げられており、それらを訓練する事が重要であると述べられている。一丸ら(2001)もクライアント理解に歪みや偏りが生じたり動揺して反援助的な対応をしないためにも、心理療法家は自己理解を深め

*鳴門教育大学 臨床心理士養成コース

**和歌山県立医大小児医療成育センター

る事が必要であるという。クライアントの援助にあたっては、セラピストがまず自身の特性や傾向、自身の感覚、言動に目を向け、どのように生じているのかといった事について理解を深める事が重要である（北島，2010）。また、心理療法家を目指す者は自分自身の理解のみならず、他者にも能動的に注意や関心を向ける事（辻，1993）や他者の立場に立って物事が考えられるといった視点を持つ事も重要であると思われる。

自己理解や他者理解については、精神看護領域においても、その重要性が述べられ、看護実習の意義として位置づけられている。自己や他者を理解していく経験を通して、学生たちは看護師として必要な知識や技術を獲得していき、知識の修得や臨地実習での体験は肯定的な患者観を育てる事につながるという（澤田，2008）。

「視点取得」においても、村瀬（2010）が自分の考え方や感じ方を他人になったつもりで客観的・相対的に捉えてみる事も臨床心理士として大事な姿勢であると述べているように、他者へ意識を向ける事や視点取得も臨床能力を向上させるために不可欠な要素だと筆者は考える。なぜなら、カウンセラーという対人援助職者にとって、自身の経験を照合せながらのクライアント理解が重要だからである。

そして、そのクライアント理解には「視点取得」をいかに会得するかが不可欠と思われる。他者の立場に立った自己を通してその人の視点や役割を想定する「視点取得」の能力には、自己と他者の心理状態を区別し正しくラベリングする能力や、他者の心理状態を直接的・象徴的に示す手がかりから過去に同様の経験をしたという自己の記憶に結びつける能力が必要であると鈴木ら（2000）も指摘している。

（2）資質向上に寄与する訓練方法に関する研究

臨床心理学の実践を学ぶ大学院の心理臨床教育・訓練の一方法としてスーパーヴィジョンやケースカンファレンスの意義が検討されている（藤沢，2005）。心理臨床学の専門的な実践の維持や向上に欠く事のできないという点でスーパーヴィジョンとケースカンファレンスは共通する教育・訓練方法である。しかし一方で、ケースカンファレンスは、①事例発表者、大学教員、参加者、司会者と大勢の人たちの中での検討である事、②スーパーヴィジョンのように週1回2時間といった継続的な検討ではなく、事例発表が少なくとも1回限りである事、③毎回毎回の面接内容への情緒的に支えられる経験よりもクライアントとの関わりを通して、初心者カウンセラーの自己成長に影響を与える、という点でスーパーヴィジョンとは区別される。

つまり、一丸ら（2001）が心理療法家の自己理解の訓練方法としてスーパーヴィジョンを挙げているが、体験的な学習に位置づけられるケースカンファレンスの場も自己理解や他者意識、視点取得の向上も可能になるのではないかとと思われる。下山ら（2002）がスーパーヴィジョンを受けながら担当している事例であっても、ケースカンファレンスの発表経験の中で、参加者の意見やコメントをもらう事により、報告者は事例を相対化し、距離を置いてみる事ができるとケースカンファレンスへの意義を述べている。今まで漠然としていたものが明瞭になり（明確化）、見えなかったものが見える（気づき）という事が事例発表者の最大の収穫であると徳田（2007）も主張している。

看護基礎教育においても、臨地実習が、看護の実践は学生にとって緊張感と多大なストレスを有する体験的な学習であるものの、自己効力感や自尊感情に影響を与える事が指摘されている（澤田，2008；伊藤ら，2010）。しかし、これまで、スーパーヴィジョンやケースカンファレンスでの体験が臨床心理士の資質向上において欠く事のできない訓練・研修であると語られているものの（鏑ら，2001）、実際にスーパーヴィジョンやケースカンファレンスの体験が初心者カウンセラーの成長や変化にどのように影響を与えるのかという事が明らかにされていない。ケースカンファレンス体験の有効性についての具体性や構造を明らかにした研究が少ないのが現状である。

また、臨床心理士養成と同様に、対人援助職である社会福祉士養成においても、カリキュラム改革の度に実習教育の重要性が挙げられ、指導内容の改善強化が行われているものの、実習・教育機関それぞれの指導が学生の学びにどのように影響を与えているのか、現状を解明する実証的研究が十分に行われていないという（坪内，2009）。

上里（2001,2002）は、臨床心理士を養成する大学院教育の課題として、組織や教員の充実、教育訓練の質の向上、入試方法の改善を挙げているが、その中でも最も大切な課題に「臨床心理基礎実習」と「臨床心理実習」を挙げている。さらに、「ケースカンファレンスがどのような形で行われどのような成果を挙げているのか」に注目し、教育や訓練方法の質の向上が最大の課題であると指摘している。田島（2008）も「臨床心理士になるための訓練を受ける大学院生は、専門業務を行う上で、役に立つものを学習し、体験する必要がある」と述べているように、その役立つ体験として挙げられるのは「ケースカンファレンス」の発表経験であると考えられる。そして、「ケースカンファレンス」の経験がクライアントの理解に留まらず、初心者カウンセラーの資質向上に大いに関

連があると思われる。

3. カウンセリング自己効力感

カウンセラーの資質向上がいかに行われたのかを考えるにあたって、カウンセラーとしての自己効力感という概念が重要になってくる。これまで、カウンセリング心理学や臨床心理学の分野において、社会から実証性や科学的根拠を提示するよう求められ (Evidence-based Practice)、カウンセラーの養成が効果的におこなわれていることを示すことは重要な課題であり、北米では、社会認知理論の分野の自己効力感の概念を用い、カウンセラーの自己効力感を測定する試みがなされてきた (Larson et al., 1992; Heppner et al., 1998; Lent et al., 1994; O'Brien et al., 1997)。社会的学習理論 (Bandura, 1986) では、個人の興味や目標がパフォーマンスに影響を与えることを明らかにし、その核となるのが、個人の自己効力感の度合いであるとした。自己効力感とは、「ある特定のタイプのパフォーマンスを達成するのに必要とされる一連の行動を組織化し、実行する能力に関する本人の見解」 (Bandura, 1986) と定義した。そのような見解は、行動や環境の選択に影響し、また、その課題への努力や忍耐力に影響することが明らかにされてきた。さらに、Bandura (1991) は、ある行動が成功するためには、スキルの獲得と、高い自己効力感が必要であることも明らかにした。この考え方を応用して、これまでにカウンセラーの自己効力感が、カウンセリングの効果的な実践にどのような役割を果たすかについて多くの研究がなされてきた (Larson et al., 1998)。これらの研究において、カウンセラー自己効力感とは、「近い将来、その人がどの程度効果的にカウンセリングをすることができるかについての信念と判断」と定義されてきた。また、カウンセラー自己効力感は、カウンセリングの成果に影響を与える重要な要因であることが明らかにされつつある (Larson et al., 1992)。日本においてもカウンセリング自己効力感尺度の作成が試みられている (葛西, 2005)。

4. 研究の目的

本研究では初心者カウンセラーの自己理解、他者意識、視点取得およびカウンセリング自己効力感がどのような体験によって変容するのかについて、3回の縦断的な質問紙調査によって検討する事を目的とした。その中でも特に、学生によるケースカンファレンスの体験、カウンセリング等の実習に焦点をあてた。ケースカンファレンスは、Z大学大学院の場合、週に一日3・4時限目の「臨床心理基礎実習」と「臨床心理実習」の授業に臨床心理士の養成に携わる関係者全員が出席するという事で、1対1あるいは少人数でのスーパービジョンよりも固定・統一されていると考える。また、実習は、学内・学外において、保育所実習、病院実習 (短期・長期)、スクールカウンセラー実習、訪問臨床実習、児童養護施設実習など様々なものが実施されており、学生は、その中から自身の興味に応じて選択することが可能である。

【対象と方法】

1. 対象

本研究の対象は、A本学大学院修士課程に在籍し臨床心理学を学びかつ附属の心理教育相談室にてケースを担当する者であった。A大学大学院修士課程は2000年度より臨床心理士養成のための指定大学院に認定されており、これまでに数多くの臨床心理士や臨床心理士受験資格者を養成してきた。臨床心理学関係のカリキュラムの構成は、臨床心理学、臨床心理面接、教育臨床、精神医学、学校精神保健、カウンセリングなどに関する講義、臨床心理査定や臨床心理技法に関する演習、臨床心理実習、面接指導実習などからなっている。また、修士課程1年次後期頃より大学の心理教育相談室で臨床事例を2～5ケース程度を担当する。それらの担当ケースに関して個別やグループのスーパービジョンを受け、ケースカンファレンスで発表することも義務づけられている。また、主に修士課程の2年次より学外の養護施設、学校、病院等で実習を行っている者も多い。大学院生は定期的な研究会や勉強会に積極的に参加したり、全国的な学会にも多数参加している。彼らの訓練・養成を担当している教員は、9名で、うち臨床心理士が8名、精神科医・小児科医が3名である (両資格保持者も有り)。教員の理論的オリエンテーションや専門分野は、多岐に渡り (精神分析、ユング心理学、人間性中心療法、認知行動療法、非行臨床、家族療法など)、大学院生は多くの理論・技法を学ぶことが可能な環境にある。

上記のような大学院に在籍している、ケースカンファレンスの発表経験前の、修士課程1年生39名に質問紙を配布した。Z大学大学院の場合、ケースカンファレンスの最終週2月の初旬頃に“引き継ぎ”という、修士課程2年生が受け持っているケースを1年生に引き渡す事が決められている。そのため、第1期の調査日を【平成22

年2月】に設けた。そのうち、回答の不備のなかった33名（男性6名、女性27名）を最終的な分析対象とした。また、第2期として3カ月後の【平成22年4月】を調査日とした。そのうち、34名（男性7名、女性27名）を最終的な分析対象とした。第3期の調査日は、ケースカンファレンスでの自身の事例発表を行った後に実施した【平成22年5月～7月】。そのうち、15名（男性2名、女性13名）を最終的な分析対象とした。なお、第1期および第2期はZ大学大学院の「ケースカンファレンス」の授業が始まる第3限目前に、簡単な研究の説明を加え、了解を得た上で、質問紙の協力をお願いした。所要時間は10～15分程度であった。第3期は、ケースカンファレンス終了後に本人に直接配布し、1週間後に回収した。

2. 方法

(1) フェイスシート

フェイスシートでは年齢や性別、過去・現在の臨床経験（ボランティアや実習、ケース経験）を尋ねた。Z大学大学院が連携する実習先には①教育領域として、スクール・カウンセラー実習（小学校・中学校・高等学校でのスクール・カウンセラーの補助的活動）や訪問臨床実習（ひきこもり傾向の不登校児童・生徒を対象に家庭訪問による心理的支援）、適応指導等教室（校内・校外の適応指導教室や保健室で不登校傾向の児童・生徒の心理的支援）、心と学習の支援実習（特別支援教室などにおいて児童・生徒の心理的支援および学習支援）、学生相談プラクティカム（学部生のボランティア・クライアントに対するカウンセリング）、②医療領域として病院実習（病院の見学実習）、③福祉領域として、児童養護施設実習（児童養護施設において児童・生徒の遊戯療法または学習支援）や子育て支援実習（乳幼児健診の補助的活動と保育園での実習）、児童自立支援施設実習（児童自立支援施設において児童・生徒の心理的支援）が該当する。また、訪問臨床は本学のケースと同様に扱う。

(2) 自己意識・自己内省尺度の「自己内省」

先行研究を概観する限り、児童・青年期を対象とした自己理解の研究は見られるものの、カウンセラーに限定した自己理解の研究は北島（2010）の論文のみである。北島（2010）は臨床心理士養成大学院の学生から経験年数の長い臨床心理士を対象に、セラピストとしての自己理解と自己モニタリングを調査したところ、セラピストとして過ごす時間と日常やプライベートが跨っているため、セラピストとしての自己理解と自己モニタリングだけを切り離して取り出せない事を示唆した。

渡部（2010）がカウンセラーのような相談援助職の実践家は人と接する限り、「正解」や「絶対」といった方法や関わりは存在しない。対人援助職者は常に実践家の有り様を振り返り、チェックする「内省的」な作業が不可欠であると記しているように、カウンセラーにとって、自分自身の内面や外面あるいはアイデンティティといった自分の性格傾向や考え方について知り、理解するだけでなく、いかにそれを能動的に観察し、考え、分析するかが必要であると考えられる。

そこで、本研究では自己内省的な要素を含む概念として「自己理解」を位置づけ、杉浦（2002）と辻（2004）を参考に「自分自身の内面や外面あるいはアイデンティティといった自分の性格傾向や考え方を能動的に観察し、考え、分析し、理解を深める事」と定義する。但し、自己内省には思い通りの結果が得られるかに関係なく、「意識的・能動的」に自身を省みるという“能動的”な自己内省を指す。ネガティブな感情や身体的不調などを感じた時に、私たちの多くはそのネガティブな感情や感覚をなくしたい、あるいは、もっとポジティブなものに変えたいという思いが生じる。しかし、それは非常に難しく、理念や思考によって自動的で受動的に生じた感情のコントロールは思い通りいかない。そのため、心身の不快感や症状に過敏になり、ネガティブな想念や感情が自動的に思い浮かび、振り払えなくなる“自動的・受動的”な自己内省ではなく、自分自身に関する課題の解決を目標とし、現実的・論理的な思考に従って進められる“能動的”な自己内省を取り上げる。

そのため、自己理解を測定する尺度には、辻（2004）の自己意識・自己内省尺度の「自己内省」4項目を用いる事にした。また、カウンセラーの自己理解が児童・青年のそれと異なり、自己内省的な要素を強く求められるという理由も背景にある。自己意識・自己内省尺度の「自己内省」は辻（2004）が信頼性および妥当性が確認している。各項目の回答は全くあてはまらない（1点）からあてはまる（5点）の5件法で尋ねた。最低得点は4点、最高得点は20点であった。内容は、普段のあなたの様子について尋ねる形式となっており、「現在のあなたにどれくらい当てはまるのか最も適していると思われる数字に○印をつけてください」と教示した。質問項目は、「自分は何ものかと考えたり、分析したりしている」や「自分自身を注意深く観察する方である」などから構成されている。

(3) 他者意識尺度の「内的他者意識」

他者理解に関する定義や論文も先行研究を調べた限りでは見当たらなかったが、類似する用語に、他者意識尺度の「内的他者意識（7項目）」が挙げられる。他者への能動的な注意や関心の程度が測定できる。「他者理解」は自己理解に対応して、カウンセラーとして、他者の外面や感情や行動などの内面の傾向について理解だけでなく、能動的な観察や分析を行い、考える事が必要であると思われる。自己内省が求められる前提あるいは同様に他者へ意識的・能動的に目を向ける事は重要であると筆者は考える。そのため、「他者理解」には他者意識尺度の「内的他者意識（7項目）」を用いる事にした。

つまり、本研究では自己内省的な要素を含む概念として「他者理解」を位置づけ、と辻（1993）を参考に「他者の心情等の内面情報を理解しようとする意識や関心を示す事」と定義する。他者意識尺度の「内的他者意識」も信頼性および妥当性が確認されている（辻，1993）。各項目の回答は全くあてはまらない（1点）からあてはまる（5点）の5件法で尋ねた。最低得点は7点。最高得点は35点であった。内容は、普段のあなたの様子について尋ねる形式となっており、「現在のあなたにどれくらい当てはまるのか最も適していると思われる数字に○印をつけてください」と教示した。質問項目は、「人の気持ちを理解するように常に心がけている」「他者のちょっとした表情の変化でも見逃さない」などから構成されている。

(4) 日本語版多次元共感性尺度の「視点取得」

「視点取得」の測定には、桜井（1988）がDavis（1983）の多次元共感測定尺度の信頼性および妥当性を検証した日本語版多次元共感測定尺度の「視点取得（7項目）」を用いた（菊池・有光，2006）。桜井（1988）は大学生を対象に、多次元な共感と心理実験への協力という日常的な援助行動との関係から作成し、「対人的反応性指標（Interpersonal Reactivity Index：菊池・有光，2006）」とも訳されている。この尺度は、「想像性（架空の状況や場面に自分を置き換えて想像する）」「共感的配慮（他者に対する同情や配慮など他者指向的な感情）」「視点取得（他者の立場に立って他者の気持ちや状況を想像する）」「個人的苦痛（他者の苦しむ場面における不安や不快など自己指向的な感情）」の4下位尺度、計28項目から構成されている。共感を認知的側面と感情的側面を含む、多次元的な視点を試みた尺度である。その中でも「視点取得」は意図的に努力を有する統制的な共感として区別され、認知的側面を表している（登張，2005）。カウンセリングにおいて、クライアントの話を聴く上で、カウンセラーがいかに、自身の経験を照合せながらのクライアント理解につなげていくかが重要であると思われる。

そのため、本研究では「視点取得」のみを取り上げる。各項目の回答は全くあてはまらない（1点）からあてはまる（5点）の5件法で尋ねた。（*）は逆転項目を示す。

最低得点は7点、最高得点は27点であった。内容は、普段のあなたの様子について尋ねる形式となっており、「現在のあなたにどれくらい当てはまるのか最も適していると思われる数字に○印をつけてください」と教示した。質問項目は、「ある人には気分を悪くされても、その人の立場になってみようとする」、「何かを決定する時には自分と反対の意見を持つ人たちの立場に立って考えてみる」などから構成されている。

(5) カウンセリング自己効力感尺度

カウンセラーの成長や発達過程を客観的に側定する指標として、葛西（2005）が「Counselor Activity Self-efficacy Scales（Lent, Hill, and Hoffman, 2003）」の信頼性および妥当性を検証した日本語版「カウンセリング自己効力感尺度」を用いた。この尺度は、基本的なカウンセリング技法に関する効力感としての「援助スキル自己効力感（15項目）」、理論に左右されない基本的なカウンセリング技法（クライアントの見立てやケースマネジメントなど）に関する効力感としての「セッションマネジメント自己効力感（10項目）」、高度で複雑な臨床例への対応に関する効力感としての「カウンセリング課題自己効力感（16項目）」の3下位尺度、計41項目から構成されている。

「援助スキル自己効力感」では、①探索過程、②洞察過程、③行動過程というようにカウンセリングを段階的に分けた上で、それぞれの段階で典型的に用いられるカウンセリングのスキルがどの程度、効果的に行えるかどうかを測定する。教示は「あなたは次回のカウンセリングにおいて、現在、担当しているクライアントに以下の援助スキルを効果的に使う自信がどの程度ありますか。最も適していると思われる数字に○印を付けてください」と示した。質問項目は「宿題（次の面接までにCIができるような治療的な課題を考え、与える）」「ロールプレイや行動リハーサル（面接中にCIができるように援助）」などであった。最低得点は15点、最高得点は75点であった。

「セッションマネジメント自己効力感（10項目）」では、「援助スキル自己効力感」で測定されるような基本的

なカウンセリング技法を用いて、一般的なカウンセリング面接を運営できるかどうかを測定する。教示は「あなたは次回のカウンセリングにおいて、現在、担当しているクライアントに以下の技法を効果的に使う自信がどの程度ありますか。最も適していると思われる数字に○印を付けてください。」と示した。質問項目は「CIが自分自身の思考、感情、行動について理解するのを助ける」「CIが現実的なカウンセリング目標を立てるのを助ける」などであった。最低得点は10点、最高得点は50点であった。

「カウンセリング課題自己効力感（16項目）」では訓練課程にある初心者カウンセラーの大半が、困難さを感じる臨床例にどの程度、対応できるかどうかを測定する。教示は「あなたは次回のカウンセリングにおいて、現在、担当しているクライアントに以下のタイプ・問題・状況を把握する自信がどの程度ありますか。最も適していると思われる数字に○印を付けてください」と示した。質問項目は「CIに自殺願望がある」「CIが最近、トラウマを経験した（身体的、もしくは心理的な損傷や虐待）」などであった。なお、3尺度とも「ケースを担当していない場合は「仮に現在、担当するとすれば」という状況を想定してお答えください」という1文を加えた。また、3尺度とも各項目の回答は全くあてはまらない（1点）からあてはまる（5点）の5件法で尋ねた。最低得点は16点、最高得点は80点であった。3尺度合計の最低得点は41点、最高得点は205点であった。

【結果】

1. 第1期【平成22年2月】

(1) 調査対象者全体の検討

自己意識・自己内省尺度の「自己内省」、他者意識尺度の「内的他者意識」、日本語版多次元共感測定尺度の「視点取得」、「カウンセリング自己効力感尺度」の3下位尺度【援助スキル、セッションマネジメント、カウンセリング課題】および「カウンセリング自己効力感得点」において、それぞれどのような関連が見られるのかについて調べるために、各平均値（TABLE.1）と相関係数を算出した（TABLE.2）。

以下、「内的他者意識」を「他者意識」、「セッションマネジメント」を「技法スキル」、「カウンセリング課題」を「タイプ問題状況」、「カウンセリング自己効力感」を「Co効力感」と記す。また、Co自己効力感の尺度内の相関は省くと、「自己内省」と「他者意識」・「視点取得」に有意な中程度の正の相関（1%水準： $**p<.01$ ）、「他者意識」と「視点取得」に有意な中程度の正の相関が見られた（5%水準： $*p<.05$ ）。

TABLE.1 調査対象者全体（N）による各尺度の平均値と標準偏差（SD）

尺度	N	平均(SD)
自己内省	33	15.24(3.12)
他者意識	33	24.42(4.72)
視点取得	33	24.52(4.07)
Co効力感	33	
援助スキル	33	39.15(10.30)
技法スキル	33	22.97(6.33)
タイプ問題状況	33	44.24(11.96)
Co効力感得点	33	106.36(23.36)

TABLE.2 調査対象者全体の自己内省、他者意識、視点取得、Co効力感の相関係数

尺度	1	2	3	4	5	6	7
1. 自己内省	—						
2. 他者意識	.64**	—					
3. 視点取得	.44**	.40*	—				
Co効力感							
4. 援助スキル	.19	.30	.16	—			
5. 技法スキル	.10	.03	.18	.61**	—		
6. タイプ問題状況	-.27	.00	-.09	.47**	.40*	—	
7. Co効力感得点	.10	.14	.08	.84**	.75**	.82**	—

注) ** $p<.01$, * $p<.05$

(2) 男女差の検討

「自己内省」, 「他者意識」, 「視点取得」, 「Co 効力感尺度 (援助スキル・技法スキル・タイプ問題状況)」, 「Co 効力感得点」の男女差を検討するために, t 検定を行った (TABLE. 3)。その結果, 男性が「技法スキル」と「Co 効力感」の得点に女性より有意な高得点を示した (**p<.01)。

TABLE. 3 男女別の平均値 (SD) および t 検定の結果

尺度	男性 (N=6) 平均 (SD)	女性 (N=27) 平均 (SD)	t 検定
自己内省	15.17 (3.25)	15.26 (3.16)	-0.06
他者意識	22.50 (4.93)	24.85 (4.66)	-1.11
視点取得	23.33 (1.37)	24.78 (4.43)	-0.78
Co 効力感			
援助スキル	46.00 (6.39)	37.63 (10.47)	1.87
技法スキル	28.67 (2.34)	21.70 (6.26)	2.66**
タイプ問題状況	52.67 (2.94)	42.37 (12.42)	2.00
Co 効力感得点	127.33 (8.78)	101.70 (23.1)	2.65**

注) **p<.01, *p<.05

(3) 過去のケース未経験群と経験有群の検討

第 1 期に調査した調査対象者 33 名中, 第 1 期以前に, 相談室や訪問臨床などのケースを持った事が有る者を過去ケース経験有群: 15 名とし, 持った事がない者を過去ケース未経験群: 18 名として捉えた。

第 1 期の調査以前にケース経験者とケース未経験者によって, 「自己内省」, 「他者意識」, 「視点取得」, 「Co 効力感尺度 (援助スキル・技法スキル・タイプ問題状況)」, 「Co 効力感得点」にどのような関連が見られるかについて, 相関を求め, t 検定を行った。その結果, 過去ケース経験有群は「他者意識」と「自己内省」, 「援助スキル」に正の相関が見られた。一方, 過去ケース未経験群は「自己内省」と「他者意識」, 「視点取得」に正の相関が見られたが, t 検定ではその尺度間にも有意な差は認められなかった。相関係数は TABLE. 5 に, t 検定の結果は TABLE. 6 に示した。

TABLE. 5 過去ケース経験有・未経験群による各尺度の相関係数
下線あり: 経験有群, 下線なし: ケース未経験群

尺度	1	2	3	4	5	6	7
1. 自己内省	—	<u>.71**</u>	<u>.25</u>	<u>.38</u>	<u>-.20</u>	<u>-.02</u>	<u>.10</u>
2. 他者意識	<u>.61**</u>	—	<u>.47</u>	<u>.63*</u>	<u>.02</u>	<u>-.04</u>	<u>.24</u>
3. 視点取得	<u>.51*</u>	<u>.39</u>	—	<u>.12</u>	<u>-.39</u>	<u>-.04</u>	<u>-.06</u>
Co 効力感							
4. 援助スキル	<u>.17</u>	<u>.10</u>	<u>.22</u>	—	<u>.58*</u>	<u>.42</u>	<u>.79**</u>
5. 技法スキル	<u>.25</u>	<u>.04</u>	<u>.38</u>	<u>.62**</u>	—	<u>.50</u>	<u>.75**</u>
6. タイプ問題状況	<u>.00</u>	<u>.06</u>	<u>-.10</u>	<u>.49*</u>	<u>.34</u>	—	<u>.87**</u>
7. Co 効力感得点	<u>.16</u>	<u>.07</u>	<u>.17</u>	<u>.87*</u>	<u>.75**</u>	<u>.79**</u>	—

注) **p<.01, *p<.05

TABLE. 6 過去ケース経験有・未経験群の平均値 (SD) および t 検定の結果

尺度	過去ケース経験有群 (N=15) 平均 (SD)	過去ケース未経験群 (N=18) 平均 (SD)	t 検定
自己内省	15.67 (2.63)	14.89 (3.51)	0.70
他者意識	24.40 (4.69)	24.44 (4.90)	-0.02
視点取得	24.73 (2.96)	24.33 (4.93)	0.28
Co 効力感			
援助スキル	35.67 (9.53)	42.06 (10.26)	-0.18
技法スキル	21.87 (4.91)	23.89 (7.32)	-0.91
タイプ問題状況	42.27 (13.40)	45.89 (10.72)	-0.86
Co 効力感得点	99.80 (22.87)	111.83 (22.96)	-0.15

2. 第2期【平成22年4月】

(1) 調査対象者全体の検討

第1期と同様に、調査対象者全体における、「自己内省」、「他者意識」、「視点取得」、「Co効力感」の3下位尺度【援助スキル、技法スキル、タイプ問題状況】および「Co効力感」得点について、どのような関連が見られるのかについて調べるために、各平均値と標準偏差（TABLE.9）および相関係数を算出した（TABLE.10）その結果、「自己内省」と「他者意識」・「視点取得」、「他者意識」と「視点取得」に有意な中程度の正の相関が見られ（** $p < .01$ ）、第1期の結果と変化がなかった。

TABLE.9 調査対象者全体（N）による各尺度の平均値および標準偏差（SD）

尺度	N	平均(SD)
自己内省	34	15.32(2.60)
他者意識	34	24.50(5.20)
視点取得	34	24.50(3.77)
Co効力感		
援助スキル	34	38.29(11.65)
技法スキル	34	22.56(7.43)
タイプ問題状況	34	43.71(12.32)
Co効力感得点	34	104.56(28.48)

TABLE.10 調査対象者全体の自己内省、他者意識、視点取得、Co効力感の相関係数

尺度	1	2	3	4	5	6	7
1. 自己内省	—						
2. 他者意識	.74**	—					
3. 視点取得	.47**	.56**	—				
Co効力感							
4. 援助スキル	.26	.20	.08	—			
5. 技法スキル	.04	.05	-.07	.84**	—		
6. タイプ問題状況	.02	-.01	.01	.70**	.67**	—	
7. Co効力感得点	.02	.09	.02	.93**	.89**	.89**	—

注) ** $p < .01$, * $p < .05$

(2) 男女差の検討

第1期と同様に、男女差を検討するために、「自己内省」、「他者意識」、「視点取得」、「Co効力感」の3下位尺度【援助スキル、技法スキル、タイプ問題状況】および「Co効力感」得点の各平均値（SD）とt検定（TABLE.11）を算出した。その結果、男性7名は女性27名よりも「援助スキル」の得点のみに有意な差が示された（* $p < .05$ ）。

TABLE.11 男女別の平均値とSDおよびt検定の結果

尺度	男性(N=7) 平均(SD)	女性(N=27) 平均(SD)	t検定
自己内省	15.57(2.70)	15.26(2.60)	0.28
他者意識	25.14(5.34)	24.33(5.30)	0.36
視点取得	23.43(2.57)	24.78(4.01)	-0.84
Co効力感			
援助スキル	46.29(9.71)	36.22(11.35)	2.15*
技法スキル	25.14(7.60)	21.89(7.39)	1.03
タイプ問題状況	51.29(8.60)	41.74(12.50)	1.90
Co効力感得点	122.71(24.31)	99.85(27.95)	1.97

注) * $p < .05$

3. 第3期【平成22年5月～7月】

(1) 調査対象者全体の検討

第1, 2期と同様に、調査対象者全体における、「自己内省」、「他者意識」、「視点取得」、「Co効力感」の3下

位尺度【援助スキル、技法スキル、タイプ問題状況】および「Co 効力感」得点について、どのような関連が見られるのかについて調べるために、各平均値と標準偏差 (TABLE.13) および相関係数を算出した (TABLE.14)。その結果、Co 自己効力感の尺度間の相関は省く、尺度間に有意な相関は観られなかった。

TABLE.13 調査対象者全体 (N) による各尺度の平均値および標準偏差 (SD)

尺度	N	平均(SD)
自己内省	15	14.3 (2.00)
他者意識	15	24.7 (2.90)
視点取得	15	26.0 (2.60)
Co 効力感		
援助スキル	15	40.4 (10.6)
技法スキル	15	25.4 (8.20)
タイプ問題状況	15	46.6 (9.90)
Co 効力感得点	15	112.4 (25.5)

TABLE.14 調査対象者全体の自己内省、他者意識、視点取得、Co 効力感の相関係数

尺度	1	2	3	4	5	6	7
1. 自己内省	—						
2. 他者意識	.28	—					
3. 視点取得	.26	.21	—				
Co 効力感							
4. 援助スキル	-.20	-.06	.28	—			
5. 技法スキル	-.19	.12	-.02	.89**	—		
6. タイプ問題状況	-.22	.10	.40	.67**	.49	—	
7. Co 効力感得点	-.23	.05	.26	.96**	.88**	.82**	—

注) **p<.01, *p<.05

(2) 男女差の検討

第1・2期と同様に、男女差を検討するために、「自己内省」、「他者意識」、「視点取得」、「Co 効力感」の3下位尺度【援助スキル、技法スキル、タイプ問題状況】および「Co 効力感」得点の各平均値 (SD) と t 検定 (TABLE.15) を算出した。その結果、男性2名は女性13名よりも「援助スキル」の得点のみに有意な差が示された (*p<.05)。

TABLE.15 男女別の平均値と SD および t 検定の結果

尺度	男性 (N=2) 平均 (SD)	女性 (N=13) 平均 (SD)	t 検定
自己内省	13.00 (0.00)	14.54 (2.15)	-0.98
他者意識	23.00 (1.41)	25.00 (3.06)	-0.89
視点取得	26.00 (2.83)	26.08 (2.72)	-0.04
Co 効力感			
援助スキル	54.50 (7.78)	38.23 (9.39)	2.31*
技法スキル	35.00 (2.83)	23.92 (7.78)	1.94
タイプ問題状況	50.00 (14.14)	46.15 (9.79)	0.50
Co 効力感得点	139.50 (24.75)	108.31 (23.93)	1.71

注) *p<.05

4. 第1期、第2期、第3期の縦断的结果

(1) 3つの時期による変化

質問紙を実施した第1期、第2期、第3期の3つの時期において、「自己内省」「他者意識」「視点取得」に違いがあるのか、また、「カウンセリング自己効力感」の「援助スキル」「技法スキル」「タイプ問題状況」に違いがあるのかについて、1元配置分散分析を行った (TABLE.17)。その結果、どの下位尺度においても3つの時期

に有意な違いはみられなかった。「カウンセリング自己効力感」についてその得点の変化をグラフで示した (FIGURE 1)。

TABLE.17 3つの時期の平均値, SD および分散分析の結果

	第1期 N=33		第2期 N=34		第3期 N=15		F値
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
自己内省	15.24	3.12	15.33	2.56	14.33	2.06	0.75
他者意識	24.42	4.72	24.50	5.20	24.73	2.94	0.02
視点取得	24.52	4.07	24.50	3.77	26.07	2.63	1.07
Co 効力感							
援助スキル	39.15	10.30	38.29	11.65	40.40	10.62	0.20
技法スキル	22.97	6.33	22.56	7.43	25.40	8.23	0.86
タイプ問題状況	44.24	11.96	43.71	12.32	46.67	9.91	0.34
Co 効力感得点	106.36	23.36	104.56	28.48	112.47	25.59	0.49

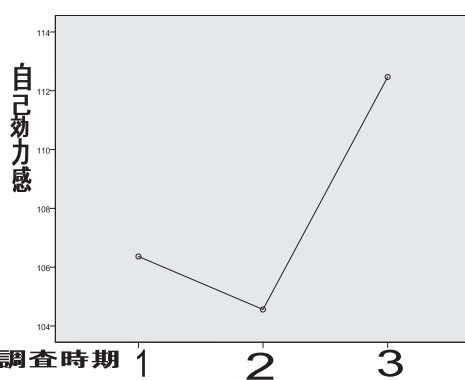


FIGURE 1 カウンセリング自己効力感の変化

(2) 第3期のカウンセリング自己効力感に影響を与える要因

修士課程1年生の2月の第1期, 修士課程2年生に進級した4月の第2期, 様々な実習や相談室での事例を担当し, ケースカンファレンスでの発表を終えた修士課程2年生の6月から7月の第3期の3つの時点でのアンケートの結果から, 第3期の「カウンセリング自己効力感」に影響を与えている要因はどのようなものであるかを検討するために, まず, 第3期の「カウンセリング自己効力感」を従属変数, 第1期の「自己内省」「他者意識」「視点取得」「援助スキル」「技法スキル」「タイプ問題状況」の6つの下位尺度を独立変数としてステップワイズ法による回帰分析を行った。その結果, 第1期の「自己内省」のみがモデルに適合する変数として残った ($R=0.76$, $R^2=0.58$, $F(1, 7)=8.17^{**}$)。次に, 第3期の「カウンセリング自己効力感」を従属変数, 第1期と第2期の「自己内省」「他者意識」「視点取得」「援助スキル」「技法スキル」「タイプ問題状況」を独立変数としてステップワイズ法による回帰分析を行った。その結果, 第2期の「技法スキル」のみがモデルに適合する変数として残った ($R=0.93$, $R^2=0.86$, $F(1, 7)=37.92^{**}$)。

【考察と今後の課題】

1. 調査対象者全体について

第1期・2期では, 「自己内省」と「他者意識」・「視点取得」, 「他者意識」と「視点取得」に有意な正の相関が見られた。まず, 「自己内省」と「他者意識」の関連では, 内省的に振り返る傾向が強いほど, 他者へ能動的に注意や関心を向ける傾向が強まると言える。鑑ら (1999) は「ひとりの人間としての自分の基盤となる感覚があるときに, 他者についても, それらをもった存在であるという感覚が大前提として生じ, 自分と他人の関係が生じる」と述べ, そこから, 浅井ら (2003) は自己を知る事ができる者は他者をも知る事ができると考察している。また, 長谷川ら (2001) は「自己への気づきは, 相手に対する誠実さにもつながっていく。自分自身を本当に正直に認めるという事は, 他者に対しても正直に対応できる事の証だからである。このような対人関係の体験を重ねる結果として, 自分自身の価値基準も柔軟になっていくであろうし, 共感的な関係も発展していく」と

述べられている事から、「自己内省」の高さと「他者意識」の高さが関連する事は予測できると考えられる。

次に、「他者意識」と「視点取得」の関連には、両者ともに「共感」の認知的側面を含んでいる事が要因に挙げられる。「共感」とは「感情体験をしている他者に対して、他者のポジティブおよびネガティブな経験（感情、欲求、知覚、思考、態度などの心理状態）と一致したあるいはそれに対応した感情的反応が起こる事」と定義され、認知的側面と感情的側面の2側面から構成されている。「共感」が他者に向けられる反応である事を考えると、「共感」にはまず他者へ注意や関心、意識を向ける「他者意識」が前提であり、「他者意識」なしに「共感」は成り立たないという事が考えられる。そして、「視点取得」は自動的・無意図的に相手と同じ感情を体験する「運動的マネ」とは異なり、意図的に行い、努力を要する点で認知的に高次のモードとして知られている（登張，2005）。つまり、意図的・能動的に他者に注意を向けなければ、相手の立場に立って相手の気持ちを想像する事は難しいと思われる。丹野ら（1996）も「他者理解には相手の立場に視点を移動する能力の発達が必要である」と述べているように、他者への能動的関心を示す「他者意識」と他者の立場に立つ「視点取得」には関連があると思われる。それから、「自己内省」と「視点取得」の関連においても、内省的な自己が強まると、他者への意識も高まる事を考えると、他者の立場に立ち物事を考える「視点取得」の傾向も同時に強くなると考えられる。あるいは、他者への能動的視点と自発的な心理的観点の取得が強まれば、他者を観る自己が意識的・能動的に意識され、自己へ注意が向けられる傾向が強まるといった捉え方もできる。

しかし、第3期においては、これらの関係は有意ではなくなった。第3期の対象人数が少ないことも関連すると考えられるが、ケースを担当し、ケースカンファレンスで発表を行ったことで、各個人の中での体験がそれぞれかなり異なったものになっていたのではないかと推測できる。ケースカンファレンスで発表したことによって、自己内省が進んだ者、クライアントへの思いが強くなり、内的他者意識が強くなった者、自身や他者など様々な視点が取得できるようになった者など、対象者全体として有意な相関がでないような分散した結果となったのではないだろうか。

2. 男女差の検討

第1期の結果より、男性が女性より有意に「Co 効力感」が高得点であった。第2期、第3期の結果でも男性は「援助スキル」得点が有意に高かった。ともに女性より男性がカウンセリング効力感のいずれかあるいは3因子が高得点だった結果は、成人を対象とした先行研究の女性よりも男性の「自己効力感」が高得点であるという報告と一致すると思われる。その理由には自己効力感が社会的活動の有無に影響を受け、男性は社会的・外交的な活動に従事する機会が多く、女性はそのような機会が少ない者を多く含むためと考察している（柴田，2005）。しかし、本研究においては、調査対象者数、特に男性が少なかった事から、今回の結果を一般化する事に限界があると言える。

3. 過去のケース未経験群と経験有群の検討

第1期の調査以前に相談室や訪問臨床などのケースを持った事が有るケース経験者と未経験者にどのような違いが見られるのか検討したところ、t検定ではどの尺度間にも有意な差は認められなかったものの、過去ケース経験有群は「他者意識」と「自己内省」、「援助スキル」に正の相関が見られた。一方、過去ケース未経験群は「自己内省」と「他者意識」、「視点取得」に正の相関が見られた。これは過去のケース経験によるこれまでの経験が生かされ、他者への能動的関心だけではなく、実際のクライアントに対してもカウンセリングのスキルを使えるという感覚に繋がり、基本的なカウンセリングスキルの程度を問う「援助スキル」の高さに関連したものである。

また、過去のケース経験者と未経験者にカウンセリング自己効力感に有意差が見られなかったのは、第1期の調査以前に経験したケースが、実際にどのようなケースであったのか、本学の相談室のケースとどのように違うのかなど、具体的な統制を行っていない事が背景にあると思われる。

4. 第1期、第2期、第3期の変化の検討

修士課程1年次の10月以降少数ではあるが、事例を担当し始め、大多数の院生は、修士課程1年次の2月【第1期調査】に、ケースカンファレンスにおいて事例の引き継ぎを受ける。その後、クライアントとのカウンセリングを毎週、あるいは隔週で行い、修士課程2年次の4月【第2期調査】からそれぞれの事例についてケースカンファレンスにおいて発表を行う。修士課程2年生の約半数の者がケースカンファレンスでの発表を7月【第3

期調査】までに終了する。本研究の結果では、この3つの調査時期において全体として「自己内省」「他者意識」「視点取得」「カウンセリング自己効力感」いずれにおいても有意な変化は見られなかった。これは、先に述べたように、個々人の変化の仕方かなり個人差があり、担当している事例がうまく進んでいるのかいないのか、あるいは、ケースカンファレンスでの発表の体験がその個人にとってどのようなものであったのかに関係し、異なってくるからだと考えられる。この点については、土橋（2010）においてケースカンファレンス終了後の個別のインタビューの分析結果からも示されている。

次に3回の調査すべてに回答した対象について、修士課程1年次の2月【第1期調査】での「自己内省」「他者意識」「視点取得」「カウンセリング自己効力感」が第3期での「カウンセリング自己効力感」に影響を与えているかどうかについて検討した結果、2月に自己内省が高かった者は、事例を担当し、ケースカンファレンスの発表を行った後の5月～7月において自身のカウンセリング自己効力が高くなっていることが明らかとなった。自己を内省し、自分は何者かと考えたり、自分自身を観察したり、自分の気持ちを分析したり、自分の行動を客観的に観察することによって、その後、事例を担当する中でも常に自身を振り返る姿勢を持ち続けるだろう。一丸（2001）や北島（2010）が述べているように、カウンセラーにとって大切なことは、自己理解を深めることである。そのためには、自身の特性や傾向を知り、自身の感覚、言動に常に目を向け、その発生原因の理解を深めなければならない。自己内省し、自己理解を深めることによって、初めて他者に目を向けることができ、他者の感情や状態を理解することが可能となるのである。また、第3期の「カウンセリング自己効力感」には、第2期の「カウンセリング自己効力感」の中の「技法スキル」が影響を与えていた。「技法スキル」とは、カウンセリングの面接を効果的に進めることができるかに関する自己効力感を問うている項目であり、クライアントの自己理解を促すことができたり、クライアントが現実的な目標を立てることできるよう手助けをしたり、クライアントのニーズに合わせた援助スキルを使用することができたり、面接中のカウンセラー自身の意図が明確になっていたりする内容である。事例を担当し始めた4月の時点でこれらの技法スキルを効果的に使用することができると感じているカウンセラーは、ケースカンファレンス自体の体験を有効に活用することが可能で、カンファレンス終了後のカウンセリング自己効力感も高まったのではないかと推測できる。

5. 養成課程において

本研究の結果から、心理療法家を志し修士課程に進学してくる学生にとって、2年間でどのような側面の訓練が有効であるかが明らかとなった。特に、修士課程の1年次の間に、院生自身の自己内省力を高めることが重要である。1年次の前期には、様々な臨床心理学に関する講義・演習を受講するのであるが、それぞれについてただ理論や技法を知的に理解するのではなく、自身の内面や経験と照らし合わせて、おのれ自身について振り返り、自己理解を深める必要がある。それが修士課程2年次の事例担当後に、自分自身は、効果的なカウンセリングを行うことができるというカウンセリング自己効力感につながるのである。そして、実際に事例を担当し始めてからは、自己内省の上に、カウンセリングの面接を遂行する力、技法スキルを身につける必要がある。それによって、さらに、カウンセリング自己効力感が高められることができるのである。修士課程1年次のロールプレイ演習、様々な心理テストの体験、感受性訓練、箱庭体験などを通して、自己内省を深めるためには、担当教員は、各院生の内的変化にも注意を向け、それを表現する機会（ディスカッションやレポート）を多く設けること必要であると考えられる。また、具体的なカウンセリング技術は、机上で学ぶだけでなく、実際のカウンセリングを担当後、その体験を通して学ぶことによって、大学院生の身につけていき、これもカウンセリング自己効力感につながっていく。

6. 今後の課題

本研究の限界と課題は以下の3点である。

①調査対象者が限定されていた事である。Z大学の院生39名、また、1回目、2回目、3回目の回収率が一致しなかった事も含め、それぞれの結果を一般化するまでには限界があった。また、性別や年齢のばらつきが大きかった。今後、調査対象者を他の複数大学に拡大する事や性別や年齢など、経験年数に基づいた詳細な検討が必要であると思われる。

②自己理解や他者理解、視点取得といった調査対象者の資質の捉え方である。本研究で使用した尺度の中には十分に信頼性や妥当性が検討されていない尺度が含まれていた事から、今後は詳細な信頼性や妥当性の検討が必要である。また、実際に自己理解や他者理解、視点取得が具体的にどのように行われているのか、質問紙法のみ

では捉えきれない側面が考えられた。今後、初心者カウンセラーとしての自己理解あるいは他者理解、視点取得であるといった点を考慮して検討していく必要がある。

③ 1回目と2回目の調査に約3ヶ月の期間を設けた事である。ケースカンファレンス発表体験前の変化を検討する為に、ケースを引き継ぐ前とケースカンファレンス発表が始まる前の時期として、2月と4月に実施した。しかし、そもそも短時間で変化しうるものなのかという点についてもさらに検討が必要である。

今後、Z大学の修士課程1年生の入学時からの縦断的な検討が考えられる。ケースカンファレンス発表体験前であれば、他の複数大学の臨床心理士を目指す院生を含めた検討を行う事は可能であると思われる。そして、量的研究から、臨床心理士養成における大学院教育の在り方を検討する上で一助となるだろう。

【引用文献】

浅井麻希子・横田恵子・高間静子 2003 看護学生の自我同一性と個人の内的属性との関係

Bandura, A. 1986. Social foundations of thought and action: A social cognitive theory. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.

Bandura, A. 1991. Human agency: The rhetoric and the reality. *American Psychologist*, 46, 157-162.

Davis, M.H. 1983 Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.

藤原勝紀 2002 臨床心理士養成に関する実践研究課題の焦点 — 臨床実践指導に関する研究課題を中心に — 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要 6, 29-40.

藤沢敏幸 2005 大学院における心理臨床教育・訓練に関する一考察(1) 安田女子大学心理教育相談研究, 4, 13-20.

長谷川浩・石垣靖子・川野雅資編 2001 共感的看護 — いま、ここでの出会いと気づき P30-32, 医学書院.

Heppner, M.J., Multon, K.D. Gysbers, N.C., Ellis, C.A., & Zook, C.E. 1998. The relationship of trainee self-efficacy to the process and outcome of career counseling. *Journal of Counseling Psychology*, 45, 393-402.

伊藤ももこ・新井清美・竹内久美子・口元志帆子・古谷剛・石光芙美子・林美奈子 2010 臨地実習が看護学生の心理状況におよぼす影響 — 臨地実習前後の自己効力感と自尊感情の変化と学生の特性との関連 — 目白大学健康科学研究, 3, 67-73.

一丸藤太郎 鏑幹八郎・滝口俊子(著編) 2001 スーパーヴィジョンを考える 誠信書房 第2部第9章, p110-121.

皆藤章 2003 最近の心理臨床事情に想うこと(巻頭言) 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要 7, 1-2.

葛西真記子 2005 「カウンセリング自己効力感尺度(Counselor Activity Self-Efficacy Scales)」日本語版作成の試み 鳴門教育大学研究紀要(教育科学編)第20巻 p61-70.

葛西真記子・中津郁子・末内佳代・久米禎子・栗飯原良造・山下一夫・塩路昌子 2009 乳幼児との情動調律による感受性訓練の効果: 心理療法家を目指す大学院生を対象に鳴門教育大学研究紀要24, 130-141.

河合隼雄 2004 臨床心理学全書 臨床心理面接技法(1) 大塚義考・岡堂哲雄・東山紘久・下山晴彦監修 伊藤良子編 誠信書房

北島貴子 2010 セラピストの自己理解と自己モニタリングに関する基礎的研究: 臨床活動に伴う自己理解および自己モニタリングの内容について 九州大学心理学研究11, 101-107.

菊池章夫・有光興記 2006 新しい自己意識的感情尺度の開発 パーソナリティ研究, 14, 2, 137-148.

Larson, L.M., & Daniels, J.A. 1998. Review of the counseling self-efficacy literature. *The Counseling Psychologist*, 26, 179-218.

Larson, L.M., Suzuki, L.A., Gillespie, K.N., Potenza, M.T., Bechtel, M.A., & Toulouse, A.L. 1992. Development and validity of the counseling self-efficacy inventory. *Journal of Counseling Psychology*, 39, 1, 105-120.

Lent, R.W., Brown, S.D., & Hackett, G. 1994. Social cognitive approach to career development: An over-

- view. *Career Development Quarterly*, 44, 310–321.
- 村瀬喜代子 2010 臨床心理士の基礎研修ファーストステップ・ガイダンス 一般社団法人日本臨床心理士会編 創元社 p27–43.
- 日本臨床心理士会 1988 「臨床心理士とは？」 財団法人日本臨床心理士資格認定協会
- O'Brien, K.M., Heppner, M.J., Flores, L.Y., & Bikos, L.H. 1997. The Career Counseling Self-Efficacy Scale: Instrument development and training applications. *Journal of Counseling psychology*, 44, 20–31.
- 下山晴彦編 2003 臨床心理学全書4 臨床心理実習論 誠信書房.
- 澤田由美 2008 精神看護実習における学びに関する研究—実習最終レポートからの検討— 新見公立短期大学紀要, 29, 81–87.
- 桜井茂男 1988 大学生における共感と援助行動の関係 奈良教育大学紀要 第37巻 第1号 p149–154.
- 柴田和恵 2005 手術患者の自己効力感の特徴, 群馬パース学園短期大学紀要7 (1), 3–10.
- 鈴木有美・木野和代 2008 多次元共感性尺度(MES)の作成—自己指向・他者指向の弁別に焦点をあてて— 教育心理学研究, 56, 4, 487–497.
- 鈴木有美・木野和代・出口智子・遠山孝司・出口拓彦・伊田勝憲・大谷福子・谷口ゆき・野田勝子 2000 多次元共感性尺度作成の試み
- 杉浦京子 2002 臨床心理学講義 失驚書房.
- 田中千穂子著 2002 心理臨床への手びき: 初心者への問いに答える 東京大学出版会.
- 田島佐登史 2008 臨床心理士養成指定大学院の院生が考える修了後に役立つ学習と体験 目白大学心理学研究 4, 35–48.
- 鑪幹八郎, 山下格編 1999 アイデンティティ. p1, 日本評論社.
- 丹野義彦・高田利武・渡辺孝憲: 自己形成の心理学 1996 pp32, 川島書店.
- 鑪幹八郎, 滝口俊子 2001 スーパーヴィジョンを考える 誠信書房.
- 土橋佳奈美 2010 ケースカンファレンスの体験が初心者カウンセラーに与える影響について 鳴門教育大学大学院臨床心理士養成コース 修士論文
- 辻平次郎 1993 自己意識と他者意識 北大路書房.
- 辻平次郎 2004 自己意識と自己内省: その心配との関係 甲南女子大学研究紀要 第40号 人間科学編 p9–18.
- 坪内千明 2009 相談機関実習の学びの構造—「支援の構造的な理解」プロセスに着目した実習日誌の質的分析— 東洋英和女学院大学『人文・社会科学論集』, 27, 17–33.
- 登張真穂 2003 青年期の共感性の発達: 多角的視点による検討 発達心理学研究, 14, 2, 136–148.
- 登張真穂 2005 共感喚起過程と感情的結果, 特性共感の関係一性の類似度, 心理的重なる効果パーソナリティ研究, 13, 2, 143–155.
- 徳田完二 2007 ケースカンファレンスによる学び 心理臨床を学ぶ 特集臨床心理学 第7巻第1号 p31–35.
- 上里一郎 2001 大学院指定性の現状と課題 大塚義孝編 臨床心理士入門—指定大学院編 日本評論社.
- 上里一郎 2002 大学院指定性の現状と課題 大塚義孝編 臨床心理士入門—指定大学院編 日本評論社.
- 渡部律子 2010 基礎から学ぶ気づきの事例検討会スーパーバイザーがいなくても実践力は高められる 中央法規出版.

Development Process of Novice Counselors : Case Conference Experiences

KASAI Makiko* and TSUCHIHASHI Kanami**

Training institutes such as graduate schools for clinical psychology have been required to produce effective clinical psychologists. In this study the development process of novice counselors was investigated using four scales : self-introspection, internal consciousness of others, perspective taking, and counseling self-efficacy Inventories. This study focuses on the case conference presentation experiences of graduate students in a clinical psychology program. Longitudinal research was conducted on 34 graduate students. Participants answered four questionnaires three times during their training process February, April, and after the case conference presentation of their own case (around June).

Results showed that scores of self-introspection in February could predict scores of counseling self-efficacy in June, and scores of session management skills in April could predict scores of counseling self-efficacy in June. Results also showed that there were correlations among scores of self introspection, internal consciousness of others, and perspective taking in February and April. Therefore, we concluded that the first half of the graduate student training process should focus on internal experiences in order to encourage them to understand themselves and develop self-introspection. In the second half of the training process, we need to teach and discuss their specific counseling skills on the basis of their own cases.

* , Naruto University of Education

** , Wakayama Medical University, Support Center for Child Development